

波枕 : 雑録

著者	松露
雑誌名	龍南會雜誌
巻	50
ページ	35-41
発行年	1896-11-15
その他の言語のタイトル	波枕 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4626

一 侍分單羽織袴はさや日野迄を許す。無禮は許さず。但し袷羽織裏付は、侍分と雖も許さず。緹は無禮とても羽織迄は許す。

一 醫者出家は制度なし百姓町人絹類一統に停止。但し町年寄等は少差あり。

一 大小の拵無禮の分は金拵停止。

其他彼の財政改革に盡せし所多しと雖も、今はこれを略し、次に田制の一斑を説かんと欲す。(未完)

余は事情の己むを得ざるものありて、久しく諸兄に見ゆることを得ざりき、今やまた寶曆の改革を叙するに當りて、田制のことはこれを次號に譲るの不幸を見るに至りぬ、諸兄願くばこれを恕せよ。

波 枕

松 露

上、 出雲紀行

「今茲夏故郷に父母を省し、間も亦く長崎に歸る友と共に長崎に遊び、止まると七日、諫早に出で、友を訪ひ、之より往來稀なる有明の岸を傳ひて、標に風色を眺つゝ之より佐賀に入り、つひに二旬の日を経て郷關に入りぬ。郷又山陰道の獨旅をなすとこなりて、知らぬ旅の寂しがるは知れど、人の行く稀なる所まで勇み進みぬ。便あしき足引の、山陰の國、珍しきとは多かれど、不才の悲しき、且は少し用もありて、よくよく調ふるを得果さざりき。只大方しらぬ人の爲、又后に行人の便にも、書ひ記してかくは物しつ。不文素より見る可きにあらず、今少し筆あらばと思へど果なく、吾年ら悲しくもおずまし。」

八月六日、朝風に仕舞終て、出雲の旅にと出立ぬ。門に送れる母、弟など別に別を告げて車馳出る時、入方に旅より歸りしまなく又、父母の下を辭して暫く旅すと思へば、何となく名殘惜しく、心うたれて后見せられぬ。

故さどをいづもの旅と思へばやかりの別れもかなしかりけり
博多の停車場に着きぬれば、車を下りて車に上り、名残惜まるゝ故郷を吐く煙と共にあとに残して、
身は早門司の港につきぬ。

筆とりて硯が海の文字が關旅のまゐるしをとめんとぞ思ふ

船を待てど便あしき北海のことゝ来て、空しく二日友の家において漸くのり得ぬ。

九日、朝六時門司下の關を煙と共にあとに残して、北の海に出でぬ。船は中の室に入ぬれど、商人な
ど多くて語らん友もなく、徒然詫しければ、甲板に出でそゝろ歩くに、漫々たる日本海は天に連り、見
渡す限り果もなく、雲晴れ天清く、心も海と廣く、折々楽しく歌ひつるに、午頃に至りて急に雨ふり
出で、名も高き響灘のれどろく、に浪激しく風荒くなりぬれば、室に入りて睡りぬ。夕方船は萩に碇
しぬ。萩には吉田松陰先生の松下塾ありて、港より半里ばかりといへど、船にある身の心に任せず。夏
橙はこの名物として、多く船に積れぬ。次に石見の國濱田港に入りぬ。

今や港は特別輸出港となりて朝鮮との貿易をなさんぞ。聯隊も亦こゝに置れ山陰の一大良港たらんとす。只惜むらくは港の規模
の小なるを北の方に良き灣あれど山嘴南北より突出して相噛み其中には船船多く碇す可きに口小に潮水淀みて動かざ爲に船に
虫付き鉄艦など入る可らずの南に又大灣あり船多く入る可し之を以て港とさんぞすれど風を受るものなく波浪の爲に害な
き能はど防波堤を築かざる可らど將來良且つ大なる港となるや否やを知らず惜むべし

十日、朝濱田を出で、温泉津につきぬ。温泉津は湯の津と呼び、よき温泉ありといへば、船にて垢つ
きぬる身の陸に上りて湯浴すべしと思へど叶はず。

名をきゝてゆあみす可しと望む甲斐も波に漂ふ鷗をそうらむ

ふど船人の話に心ともなく耳傾れば、げに果なきは船人のたつきなりけり。船板一枚下は死の海のお

すをもまらぬ命なればとて、船にて得たる數日の務のまろも陸に上りて、一夕の樂を貪り、心のまゝに色を買ひ甘を食ひて、水泡の沫と消へしむる心根のさもしさ。人骨堅く力強き時は長からず、若きは必ず老ゆ、血枯れ肉落ては、食ふすべ衣さるたつきも、白波の業にも墜ち、或は乞食の輩ともなりなん、情ある者誰か涙を灑がざらんや。

浮艸の根もなき人の心かな明日をもまらでたゞよへる身の

浮艸の水に任せてたゞよへばいかでか人の人にてあるべき

午過になりぬれば、北に向ひし船の舵を東にかへて、いよいよ出雲の海岸となりぬ。眞北に風浪を受けるなれば、斷崖絶壁、出入刻裂、奇石怪岩、恐しき計りなり。或は大海を呑んとて大なる口開けるが如き、或は穴に物を探るが如く波の靜に入りて得こそ取たれといへばへに、白き花を散して、笑ふが如く出来るなど形容も及ばず。

北海の波の力を恐ろしき山をかみつゝ岩をくださつ

人の姦しく、わきよくと呼はれば、何かある鯨もやと思ひけるに、さて大なる動かざる鯨にして、限知られぬ沖を遙に黒き嶋の見へけるなり。人にとへば隱岐の島にて、彼處には後鳥羽の院の御稜、後醍醐天皇の御所の跡ありとよく話し續ける内に、われに向ひて九州には不知火とやいふものありとか、いかなる物にかと問ひければ、まかくと答へけるに、されば隱岐にもそれによく似たるものこそあれ。かゝるものは不思議としてのこし、愨に牽強附會けんは愚なり、そは何といふに、師走の晦日なりけん、此夜隱岐の西の嶋なる燈火神社の下に、油をつぎて燈火つくる用意をなし置くに、その不知火の如く大なる火の塊、ふいと出で小さき數多き火と散りて、そのあかしに火を點す、實に不思議に

て、此夜は皆嶋のもの見に行くとなり。後鳥羽院には此火を御覽せて、御製の歌あり、よくは覺えねど下の句に何をたく蕩の光なるらんと遊しけるに、夢の中に神々しき鶴髮鸞髻の翁現れて、何も燒火の光なるらんとせよとありけるとかや、と物語りかゝることも不思議なれば、よく明し得る方なくては、物知り顔に理を付ぬものなれ、世間に不思議はいと多きものなれば、と面白くさゝて、隱岐へも渡り見んと心定しぬ。船は早美保の關の岬にかゝり、伯耆の大山は高く雲に聳へて、諸々の山は朝するが如く、其裾遠く海にはへて、遙に隱岐の島に臨む様嚴く亦大なり。

雲の衣引まどひつゝ裾はへてたきを遙に渡らんとすらん

夕暮近く、美保鼻を右に見て、境の港に入る折から、不圖船は止まりぬ。淺瀬にのり上げゝるなれば機械もて動かせど波のみ起りて少しも動かさず、終に船人三人、綱もて海に飛込で、泳ぎの競をなしぬ。大綱を岩に結びて引寄せんとすれど動かさず。潮くる迄に俟つより外に術なしとて、漁り船に乗せて境の港迄送りぬ。宿は唐津屋にとりぬ、名をさゝても故郷のことを思ひ出でぬ。

宿の名を唐津とさくも思ひ出づれわれを松浦のふるさと人を

長さ船の旅につかれて、直ちにまどろみぬ。

かぢ枕たのしきこともありそ海の波のまにくうくもある哉

十一日、朝とく起出で、朝げきたゝめ、松江にと小蒸瀛にて向ひぬ。境は伯耆の國にしありて夜見が濱をつたひて米子には三里ばかり、米子より境迄は、さながら天狗の鼻の如く長く、中の海と外海とを限り、出雲の美保が關と、人の字の形をなしぬ。神代の頃初めて、素蓋鳴尊が降かましゝ所とてにもあらざらめれど、人の字をなしぬるも事ありけなり。又中の海には空洞船そりこにのりて、漁りするもの多

きを見れば大古の名残と玄のばる。

千早振神代のことも忍ばるれ古き國なるものと見て

中の海を渡りて、船は松江市の大橋につきぬ。大橋は其名の如く、大なる橋にして市街をつらぬ。この橋より上は宍道湖と見えて風景佳に目には入れぬ見えず、心こゝにあらざりけん。車にて岩佐尚一の君を訪ふ、旅してあらずとき、木村祥南の君を尋ねれば、今來し道なりと玄らぬことゝてをかし、君を訪へばあり、玄らせず來しなれば驚きていざと計り、すゝめ上げ厚くもてなされぬ。

波枕いくよさびしき旅のうちにゆめかどばかり友の嬉しき

十二日、知らぬ人の中に親しき友と逢ひ、心落つき朝遅く迄熟寝しぬ。午頃より出で、松江市をあるき、徳谷豊之助君を訪ひ三人にて龜田山千鳥城に上る。松平直正公の居城にして今は墟のみ残り、櫻の若木多く植て公園となりぬ。天主閣ありて昔の名残を留められたれば之に登りて四方を眺むれば、そゝろに風光の美にうたれて、暫くは吾を忘れぬ。

このけしきその名もいとゞ高きやに登りて見れば驚かれぬ

冷風そよよと肌を襲ひて、夏のあつさも忘れ、靜かに眼を放てば、宍道湖は一面の鏡にして、波瀾驚かず長煙一空、壁の如く繞れる山の影は逆に映りて、一幅の畫の如く言葉も及ばれず。思へば宛も岳陽樓に上るもかくやと計り、衙遠山谷長江浩々瑞々横無際涯朝暉夕陰氣象萬千の歡を見、皓月千里浮光躍金靜影沉璧漁歌互答の景、陰風怒號濁浪排空山岳潛形商旅不行の狀なりけりと思はれぬ。

山影をさかさにかさうつしうるはしき鏡の湖の畫のごとくなり

美はしく景色をこむるけむのうちに畫にあらざりき船ぞ走れる

友は遠く指をさして、彼の山は尼子氏の籠りし所、彼處は山中鹿之助が毛利氏と戦ひし所など、くさくさいへど史をえらぬものから、只さゝすごしぬ。やがて時もたちぬれば下りて、友の家につき、夕根岸磐井の君を訪ひ樂しく酔ひぬ。

十三日、朝より出で、町を徘徊あるさ、松江市品評會に行きて見てけり、物産は中々多く山陰道の大都會に耻ぢずといふ可し。此あくる朝より隱岐へ渡りぬ。隱岐の記は次に物せん、こゝには出雲のみをえらしぬ。

二十三日、隱岐より歸りて木村の君につきぬるが、又杵築の大社へと立ちぬ。大橋より宍道通ひの湖上汽船にのりて庄原に至り、之よりかち歩にて進み、簸の川の橋にかゝりぬ。此川は船通山より出て、宍道に注ぐ大なる河なり、此川の川上こそ、素盞鳴尊が大蛇を切りて叢雲の劍を得給ひし所なれ。

簸の川の川源遠く石の上古き昔をしのぶ今日かな

夕方杵築につき、福岡に来れる廣瀬うじの故家を尋ね、せちに來よとすゝめられければ、志をうけてやすみぬ。大社に參でぬれば、大社とは我國にて最大なる社なれば言ふとか、實にさもありなん、域内廣く寂しくもありて、神々しさの身にえみぬ。堂の高さ八丈なり、見仰げて驚きぬ。大國主神、事代主神を祭る。后に山三つならびて立てり、中を八雲山、右を鶴山、左を龜山といひ、域内には玉垣、荒垣、瑞垣ありて三重になり、荒垣の内に神々をまつり、神無月に八百萬神神集ひまして、縁を結ばるゝてふ殿あり、又其御宿あり。一々心にとむることを得ざりき。

八雲しゝその上ふるの御やしるに參でし身こそかしてかりけれ

二十三日、此家のわれと同一年頃の君と打つれて、山路崎嶇、斷岸絶壁の中腹なる阻路を行きて、日

の御崎に向ひける、頭上には深く繁れる森の、齒よりも鋭き岩をもて人を噛んどし、脚下には數俣の遙下に、海は大波の舌をもてわれを呑んとして恐しかりけり。宮に參で、二時頃同じ道をたどりて歸りぬ。夕方又大社にまゐりて寶物を見ぬ、重之助てふ彫刻師の手になれる稻田姫の立像あり、中々の作なり。その外色々あれを書えらさす。去年の今宵は盆の十五日なりとて、故郷にまたしき友と遊びしに、今や旅の身の獨り月にうたふ、さてもうたてく故郷の思ひ出らるゝ、親の君、弟などの俣つらんとて、心急かされて歸りたうなりぬ。

この月やふる郷人を照すらんわが思ふことを言つたへせよ

二十四日、松江に同じ道を急ぎて、木村君につきぬ。あくる朝、岩佐の君歸れりときき、てれとづれ、又根岸君に行き、夕樂しく湖の邊に酒くみて別をなしぬ。旅にて人の心の冷さにこはれりしが、多くの友の志厚きにとけてうれしき旅を終へけり。さてその明る日、木村の君に長く厚き志を受けしを謝し、別を告げて松江を跡にしぬ。歸さは同じ來し道を、船にて歸りぬれば記すことなし。

二十八日、つひに安く門司の港につきぬ。省みれば得る處もなく筆とれど文成らず、文字が關にたのめしこともあたなりき。

視海にたのめしこともあたなれや文字の關にはどむるものなく

隠几憐清曉。開軒命濁醪。西風行薛荔。白露縵蒲桃。

氣通蟬聲苦。天含雁影高。壯心堪自見。秋色正滔滔。